

【旧約聖書日課】箴言 3章1～8節

- 1 わが子よ、わたしの教えを忘れるな。
わたしの戒めを心に納めよ。
- 2 そうすれば、命の年月、生涯の日々は増し
平和が与えられるであろう。
- 3 慈しみとまことがあなたを離れないようにせよ。
それらを首に結び
心の中の板に書き記すがよい。
- 4 そうすれば、神と人の目に
好意を得、成功するであろう。
- 5 心を尽くして主に信頼し、自分の分別には頼らず
- 6 常に主を覚えてあなたの道を歩け。そうすれば
主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださる。
- 7 自分自身を知恵ある者と見るな。
主を畏れ、悪を避けよ。
- 8 そうすれば、あなたの筋肉は柔軟になり
あなたの骨は潤されるであろう。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 4章8～16節

⁸あなたがたは既に満足し、既に大金持ちになっており、わたしたちを抜きにして、勝手に王様になっています。いや実際、王様になっていくれたらと思います。そうしたら、わたしたちも、あなたがたと一緒に王様になれたはずですから。⁹考えてみると、神はわたしたち使徒を、まるで死刑囚のように最後に引き出される者となさいました。わたしたちは世界中に、天使にも人にも、見せ物となったからです。¹⁰わたしたちはキリストのために愚か者となっているが、あなたがたはキリストを信じて賢い者となっています。わたしたちは弱いが、あなたがたは強い。あなたがたは尊敬されているが、わたしたちは侮辱されています。¹¹今の今までわたしたちは、飢え、渇き、着る物がなく、虐待され、身を寄せる所もなく、¹²苦勞して自分の手で稼いでいます。侮辱されては祝福し、迫害されては耐え忍び、¹³ののしられては優しい言葉を返しています。今に至るまで、わたしたちは世の屑、すべてのものの滓とされています。¹⁴こんなことを書くのは、あなたがたに恥をかかせるためではなく、愛する自分の子供として諭すためなのです。¹⁵キリストに導く養育係があなたがたに一人いたとしても、父親が大勢いるわけではない。福音を通し、キリスト・イエスにおいてわたしがあなたがたをもうけたのです。¹⁶そこで、あなたがたに勧めます。わたしに倣う者になりなさい。

【福音書日課】ルカによる福音書 8章4～15節

4大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がそばに来たので、イエスはたとえを用いてお話しになった。5「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。6ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。7ほかの種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、押しつぶさってしまった。8また、ほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスはこのように話して、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。

9弟子たちは、このたとえはどんな意味かと尋ねた。10イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密を悟ることが許されているが、他の人々にはたとえを用いて話すのだ。それは、

『彼らが見ても見えず、
聞いても理解できない』
ようになるためである。」

11「このたとえの意味はこうである。種は神の言葉である。12道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪魔が来て、その心から御言葉を奪い去る人たちである。13石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである。14そして、茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快楽に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。15良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。」

「種蒔きのたとえ」【こども説教のために】

日曜日の教会へと集められてきたわたしたちは、礼拝で何よりも「神の言葉」を聞こうとしています。礼拝を終えて、それぞれの生活に戻っていくとき、今日聞いた「神の言葉」を携えていることを願っているのです。そうであればこそ、わたしは、ときに「牧師が語った説教は忘れて行ってよい」とさえ申し上げるのです。けれども、主イエスならば、そうはおっしゃらなかったかもしれません。ご自分のお語りになられた説教が聞いた者の心に残り、それによって「神の言葉」が聞こえてくる者になることを、主イエスは望まれていたのに違いないのです。

主イエスは、しばしば「たとえ」を用いて説教なさいました。その中でも「種蒔きのたとえ」は、弟子たちの心に強く残るものだったのでしょう。だれかに説明をしてもらう必要がないほど分かりやすい「たとえ」です。それでも、弟子たちは、主イエスがさらにこの「たとえ」の意味をお教えくださることを願いました。

「種は神の言葉である」。そうお語りくださったときから、主イエスの説教は、「神の言葉」の「たとえ」になったのです。その「たとえ」は、心に根づき、芽を出し、「神の言葉」の実りを結ばせるようになったのです。

「種を蒔く人」

「たとえ話」は、何か別のことを伝えるために用いられます。良い「たとえ話」であれば、余計な説明をしなくても本当に伝えたいことが伝わるようになるものなのでしょう。「たとえ話」によって、本当に伝えたいことが、うまく理解されるようになるのです。とは言え、本当に伝えたいことが聞かざる者の想像を超えた事柄であったならば、必ずしも、そうはならないかもしれません。たとえば、それが「神の国」に関する事柄であったならば、です。

主イエスの「たとえ話」はいつでもそうですが、「種蒔きのたとえ」も、一度聞けば憶えてしまえそうな、単純な「たとえ話」です。けれども、その「たとえ話」が、非常に明快に「神の国」の理解を聞いた者にもたらしたか、というと、必ずしもそうではなかったようです。弟子たちは、「種蒔きのたとえ」の意味を、あらためて聞き直さないではいられなかった、というのです。

興味深いことに、福音書は、そのときのこととして伝える一連の逸話で、主イエスが弟子たちの求めに応じてすぐに「種蒔きのたとえ」の意味を説き明かしてくださった、とは物語っていません。主イエスは、弟子たちに問われているのではないことをまず彼らにお語りになられた、というのです、「あなたがたには神の国の秘密を悟ることが許されているが、他の人々にはたとえを用いて話すのだ」と。

どうも弟子たちだけは、他の人々から区別され、特別扱いしていただいているようです。「神の国の秘密を悟ることが許されている」とは、なんと素晴らしいことでしょうか。わたしたちも、この弟子たちと共に、「神の国の秘密を悟ることが許された者」にさせていただきたいと思いませんか。

けれども、主イエスは本当のところ、弟子たちを他の者たちと区別して特別扱いしようとなさったわけではないのかもしれませんが。「悟ることが許されている」と言われていますが、それは、「知ることが求められる者になる」という意味かもしれないのです。「たとえ話」を聞くことまでで留まっていることを許されず、その本質を知って語ることが求められるようになる、ということだとしたら、「弟子たちの一人にさせていただかなくてもよい」と思われる方もあるかもしれません。

主イエスは、確かに、このとき弟子たちに、「種蒔きのたとえ」の意味を説いてお教えくださいました。彼らは、「神の国の秘密」の一つを、それによって知ることができたのでしょうか。けれども、彼らは、「種蒔きのたとえ」が示す「神の国の秘密」は、このとき主イエスがお教えくださったことに尽きない、と気づいていたのではないのでしょうか。弟子たちの教会は、この「たとえ話」を、「種のたとえ」ではなく、「種蒔く人のたとえ」として主イエスがお語りくださったものとして、なお語り伝えたのです。

「良い土地」を信じて

たしかに、主イエスの「たとえ話」は、「種を蒔く人が種蒔きに出て行った」と始められています。「種蒔く人」に焦点が当てられているのです。あとで弟子たちに「たとえの意味」をお教えくださったときに、「種は神の言葉である」と種明かしをしてからお語りになられたのとは、焦点が違うのです。

弟子たちは、確かに、主イエスのお語りくださった教えや、為された働き、そしてその十字架の死と復活にいたるご生涯について、初代の教会で語り、伝えるという難しい役割を担うようにされました。彼らは、確かに、「神の国の秘密を悟る」ようにされたのでなければ到底為し得なかったようなことを、果たしたのです。それによって、二千年の間受け継がれる教会が建てられたということは、間違いありません。

ただ、疑問があります。弟子たちは、いつから「神の国の秘密を悟る」ことができるようになったのでしょうか。このときからでしょうか。主イエスが、このときからいつも、他の人々には語られないような「神学講義」を弟子たちだけに施してくださったのでしょうか。そうだとすると、主イエスの「神学講義」を、弟子たちがすぐに理解し、悟るようになったとは、とても考えられないのではないのでしょうか。

主イエスの「種蒔きのたとえ」を伝えた弟子たちの一人は、「ペトロ」と主イエスから呼ばれるようになった「シモン」であったでしょう。「ペトロ」というのは、「岩」という意味の語です。アラム語で「岩」を意味する「ケファ」の音で呼ばれていたと考えられます。主イエスは、彼のことを「岩」のように堅固な土台を持った者と見られていたのでしょうか。それとも、「岩」のように頑固な者と思われていたのでしょうか。

「種蒔きのたとえ」の中で、主イエスは、「種蒔く人」が蒔いた「種」の中に、「石地に落ち」たものがあつたとお語りになられました。この「石地」と訳されている語は、「ペトラ」です。「岩」です。そこに落ちた「種」は、「芽は出たが、水気がないので枯れてしまった」と、主イエスは言われたのです。

シモン・ペトロは、この「種蒔きのたとえ」を聞いたとき、すでに「ペトロ」と呼ばれていたのでしょうか。そうだとしたら、彼は、主イエスの言葉に驚いたかもしれません。「あなたに語った神の言葉は、芽を出すのが、水気がないので枯れてしまうだろう」と言われていると、思わなかったはずがありません。けれども、彼ペトロは、何者になったのでしょうか。主イエスに蒔かれた「神の言葉」という「種」が、その後、何百倍にも実を結ばせることになる教会の初穂となったのではなかったのでしょうか。

石地のペトロが、百倍の実を結ばせる**良い土地**になったのです。これは不思議なことです。けれども、これこそが「**神の国の秘密**」なのです。